

の人だよ。大学で私の後ろに座つた。
かわいいなど思つて次の日デートした。
とのろける。台湾にはあまりない、最上

の女性らしい部分に惹かれたという。「野
球して汚れた服を洗つてくれてびっくり
した。朝もサンドウイッチを作つてくれ
たりね。絶対にこの人と結婚すると決め
た。日本に来てからいろんな地域の病院
に行つたけど、本当に県民性というのは
ある。最上の女性はとてもよく働く。勤勉。
頭もいい。我慢力がある。おしんみたい

だよ。(笑)」そうして、7年間の交際を経
て卒業と同時に結婚。兵役を済ませ来日、
平成3年に博士号を取得するまで東北大
学医学部及び各地の関連病院で研究と勤
務に励んだ。同年、現在の山形県立新庄
病院で脳神経外科の医長になった。奥様
の開業もあり新庄に定着した。

「いつの間にかだよ」と蘇先生は言う。
ひたすら学問に打ち込んできた半生が、
様々な出会いや要因を重ねて新庄に降り
立ち、最上の地域医療の中枢を担うに至つ
ているのだ。そんな彼から最上は、日本は、
どう見えるのだろうか。

「来日したばかりのとき、日本は本当に
豊かで驚いた。路上で暮らしている子ど
もはない。保険証一枚で誰もが病院に
行ける。生活保護も受けられる。治安が
いい。最上でもそう。国中が豊かだと思つ
た。」日本に来た留学生が日々に言うこと
があると言う。日本の子どもはみんなか
わいいと。見目麗しいとかの単純な意味
ではない。「ファンションもそうだけど、

みんな安全なところで安心して育つで
しよう?親も一所懸命に世話をする。だ
から日本の子どもはかわいいれる。海
外の貧しい地域の子供、今日何を食べら
れるか分からぬような子どもたちはか
わいくなんかいられない。医療の分野で
も日本はすぐ健全。田舎にも診療所が
ある。国民皆保険で人口が少ない地域で
も同じ豊かさ、同じ医療サービスが受け
られる。これはすごいこと。」しかし日本
人はそこにあまりにも無自覚なのではな
いか。と、蘇先生は続ける。「日本人は保
険屋には感謝するのに国に感謝しないの
は何でだろうと思う。入院日額5千円を
2週間もらえるからとかね。それで例え
ば施設に入所して9万円かかったと驚く
けど、本当はその裏で国に72万円払つて
もらつてる。もっと国に感謝するべきだ
と思う。」私たちが当たり前のこととして
享受してしまつてはいるかも知れない日本
の医療サービス、その大切さを蘇先生は
忘れてない。

「最上に骨を埋めるよ。」日本の、最上
の地域医療に捧げてきたキャリアもあと
2年で終える。今まで指導してきた研修
医は20名以上、現在も2名。「今でも親子
みたい」な教え子たちも、今は全国各地
の病院で活躍している。定年後の人生に
ついて「何も心配していないよ。たとえ今
日死んだとしても毅然とね。自分の父が
そうだったように。」と語る蘇先生の言葉
には、日本の地域医療を確かに担い、や
りきつてきた男の自負がこもつていた。



P4 写真

診察時には、端的にかつてこやかに患者さんと向き合う。本人のためを思い、時には厳しい表情を見せることも。

P5 写真（上から）

- ・回診の様子。決して和やかな場面ばかりではない現場でも、コミュニケーションは欠かせない。
- ・デスクに向かい、研究論文を書くことも大事な仕事の一つと話す、蘇先生。
- ・母校の記念誌の掲載記事を誇らしく指差し、恩師との出逢いに想いを馳せる。

